

# 村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

## 第16回村野藤吾賞

設計者 安田幸一（日建設計・現東京工業大学助教授）

作品名 ポーラ美術館

ポーラグループ先代会長・鈴木常司氏による40数年にわたる美術コレクションは9500点を超える規模のものとなった。そして30数年前、五反田本社ビルの設計を担当した林昌二氏（現在・日建設計名誉顧問）との長い信頼関係を育てつつ、美術館建設の夢を持ち続け、早くからそのための土地を用意していたと聞く。そしてこの美術館は設計当初から完成までに10年間を要し、林氏の意を受けて安田幸一氏が全面的に担当した。

昨年オープンしたこの美術館は、富士箱根伊豆国立公園の仙石原の小塚山の麓に広がる深い原生林の中にある。樹齢数百年のブナをはじめ、ヒメシャラ・山法師・イヌシデ等の巨木からなる落葉広葉樹林が厚い苔を纏いながら、60,000㎡の敷地を包み込んでいる。そこは周辺からまったく独立しており、道路端の控えめな案内板のみにより美術館の在り処を知るだけである。周囲からも延8,000㎡の美術館の姿をほとんど見せることはない。道路からはアプローチとその先のエントランスホールだけが視野に入り、それが木洩れ日の中で透明に光って来訪者を導く。

美術館に入ると、緩やかな起伏の山々に沿った視界が開ける。さらに視線は地下2階までの4層を連ねる吹き抜けアトリウムを下降し、美術館全体の立体構成を瞬時に把握できると同時に、周辺の自然の起伏と緑と風と光と内部空間総てとの共演関係を理解させてくれる。

アトリウムの内壁は4層を貫き、時々刻々と柔かく変化しつつ下降する自然光と、その壁面シャフトに内蔵する縦のポリカーボネートのパイプに導かれて上昇する人工光との緩やかな共演をみごとに生み出している。自然光に託された季節と時刻と気象の移り変わりに人工のコントロールされた光を共存させ、ゆらぐような統合を見せるのである。それが印象派の作品を軸としたコレクション観賞の前奏となっている。

展示室に入るや、その静謐な光空間に一刻立ち止まらされる。光源の存在を見せない柔らかい銀色の光が静かに満ちている。それは光ファイバーと精巧に処理されたホワイトコンクリートパネルによって作り出されたものである。その光が観賞への集中を快くしてくれる。

この美術館の企画・設計そして実現までには多くの問題解決のための技術開発があった。

この美術館は決して小さくない規模にもかかわらず、その大きさを見せることがない。厳しい法的規制と自然への配慮から、建築の大部分を地表に現さないという条件設定の上に計画を進めている。土圧、水圧への対策と同時に伏流水脈への影響を避けるため、建築をコンパクトにしつつ、それを地表から埋め込んだ径78mの逆円錐形のコンクリートのすり鉢の中に浮くように入れ込み、免震建築としている。これを美術館の展示機能の条件の解決につなげつつ、周辺に与えるボリューム感を小さくする結果にもなっている。

この地は深い霧に包まれることが多い。岩も大樹の幹も深く苔むしている。このRCのすり鉢も数年を経ることで深い苔に覆われるであろう。そのとき、このすり鉢状の構造物は大地と一体となり、自然の側のものとなると期待したに違いない。自然の業を人工に呼び込み、人工を自然の側に移行する試みがここに計られている。

大地と森と空の間の建築に、優しいコレクションの色光が浮遊する明るい感銘に出会った。

村野藤吾記念会 代表 池原義郎